

30MINUTES MISSION —白い旋律—

大神

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

地球軌道上に空間転移門（ゲート）が突如出現した“スカイフォー”から数十年が経過していた。

未だ世界紛争は至る所で起きているが、ある兵器の誕生が近代戦闘の戦術を一変させる。

拡張型武装及びモジュール結合システム通称“エグザマクス”《EM》の登場が瞬く間に世界の軍事バランスを塗り替えた。

2XXX年末。

再び、地球軌道上に空間転移門（ゲート）が出現する

ゲートから現れたのは、地球人と似た容姿の惑星バイロン人だった。

バイロン軍はエグザマクスとよく似た機体“ポルタノヴァ”で各国に攻撃を開始。

紛争をしていた各国は地球連合軍を結成。

地球連合軍とバイロン軍の戦いの火蓋が切って落とされる。

目次

説明書き	1
第一話 起動（スタート・アップ）	6

## 説明書き

地球軌道上に空間転移門（ゲート）が突如出現した“スカイフォー”から数十年が経過していた。

未だ世界紛争は至る所で起きているが、ある兵器の誕生が近代戦闘の戦術を一変させる。

拡張型武装及びモジュール結合システム通称“エグザマクス”《EM》の登場が瞬く間に世界の軍事バランスを塗り替えた。

2XXX年末。

再び、地球軌道上に空間転移門（ゲート）が出現する

ゲートから現れたのは、地球人と似た容姿の惑星バイロン人だった。

バイロン軍はエグザマクスとよく似た機体“ポルタノヴァ”で各国に攻撃を開始。

紛争をしていた各国は地球連合軍を結成。

地球連合軍とバイロン軍の戦いの火蓋が切って落とされる。

・エグザマクス（EXAMACS）

Extended Armament & Module  
Assembly & Combine System

（拡張型武装及びモジュール組立結合システム）の頭文字「EXAMACS」通称「EM」

機体の各部分はモジュール化され、環境に合わせて機体の各部分を交換し、

様々な戦況に対応できるシステムを搭載した機体である。

パーツの換装による能力の変更・拡充がエグザマクスの真骨頂である。

### ●地球連合国軍

eEXM-17 アルト（地球連合軍）

モデル：第3世代型

全高：16m

重量：31.5 t

IT企業「サイラス」が開発した地球連合軍に所属しているエグザマクス。

機動性、操縦性に優れたスタンダード機。

拡張性に特化しており、現行兵器との互換性が高い。

世界各地でオリジナルカラーや追加装備を施され配備されている。

eEXM-21 ラビオット

\*コントラルト隊

連合国軍のエース部隊。どんなに困難な作戦でも

30分

以内に成功させ、戦場の戦局を大きく変えてしまう

とすることで敵味方問わずその名を轟かせている。

使用機体は連合国軍標準機体のeEXM-17 アルト。

基本的に6機編成二個小隊で行動している。

機体カラーが色とりどりで部隊名と掛け合わせ、

味方からも「コントラスト隊」と揶揄される事もある

部隊員

隊長 ラルゴ・カートン

参謀 ダンテ・アン

隊員 蓮斗・リゾルト (※)

プレスト・アマービレ

ビバーチェ・ヴィーヴィオ

アツテラ・マールチャ

●バイロン軍

bEXM-15 ポルタノヴァ (バイロン軍)

モデル：第3世代型

全高：16 m

重量：35.2 t

バイロン軍に所属しているエグザマクス。

耐弾性、出力に優れたスタンダード機。

曲面を多用した装甲で、実弾、ビーム兵器のどちらにも対応する耐弾性能を追求。

ビーム兵器の使用を想定した高出力機体。

本国には、「黒の近衛師団」をはじめとする主力部隊が存在するといわれている。

#### \*黒の近衛師団

バイロン軍のエリート部隊。バイロン軍の中枢たる

十二名家が所属する部隊。十二の大隊に分かれて

おり、それぞれ十二家の当主を筆頭に添え派閥を

作っている。その中でも序列五位のザガート公爵家が

率いる第46旅団のエース、トロワ・グレイシアは

平民の出自ながらもその卓越した操縦技術と

バイロン軍の姫、フォルテ・V・スフォルツアートに

忠誠を誓うその姿に一目置かれている

#### ●メンバー

蓮斗・リゾルト

18歳 男性

地球の高校に通う一般生徒。高校の授業で必修科目と

なっているエグザマックスの操縦では他とは抜き出た

成績を修めている。家族構成は蓮斗と妹1人。

母親は妹を生むときに既に亡くなっており、父親は

突如として行方知れず。親戚のあてもない。

今は国営の集合住宅に住み、アルバイトなどを

掛け持ちして生計を立てている。

ある日事件に巻き込まれ、偶然その場を輸送中だった

エグザマックスに乗り込み、それを終息させる。

これを機に地球連合国軍と関わりを持たざるを得なく

なる。機体カラー 白

蘭香・リゾルト

12歳 女性

地球の小学校に通う女子生徒。兄の蓮斗と共に生活している。兄を助けようと自宅の炊事洗濯などを自ら引き受ける優しい性格。

人懐っこく、コミュニケーション能力はとても高い。うっかり者のところもあるが、その実ちやっかりしている。

プレスト・アマービレ

18歳 女性

蓮斗と同じ高校に通う女子高生。父親が軍の高官であり、自身も軍に所属する軍人。蓮斗とは幼馴染でよく世話をやいている（つもり。実際には世話をやかれている）。蓮斗からは軍人には向いてない性格と言われるが、軍のエース部隊に所属するほどの腕前。蓮斗からはプーレと呼ばれ、蘭香からはプー姉と呼ばれている。

機体カラー オレンジ 接近戦重視

トロワ・グレイシア

17歳 女性

バイロン軍黒の近衛師団ザガート公爵直轄第46旅団隊長。出自が平民で女性ながらも公爵直轄の部隊の隊長を任される叩き上げのエリート。元はバイロン軍の姫であり、歌姫とも称されるフォルテ・V・スフォルツァートの教育係として軍入りしたものの、姫に敵対するあらゆるものから守りたいと言う思いから姫のそばを離れ、力をつけるためにエグザマクスに乗ることを選ぶ。その想いをザガート公爵に買われ、直接師事を受け、公爵直轄の部隊に招集された。

父親は元は研究者だったが研究中の事故で帰らぬ人となる。

機体カラーはレッド

フォルテ・V・スフォルツアート

16歳 女性

バイロン軍の姫であり、バイロン王国の国王、

ゼスト・V・スフォルツアートの一人娘である。

病床に倒れながらも王国のために立つ父のために歌を歌っていたらいつの間にか歌姫とまで持ち上げられていた。

トロワとはとても仲が良く、彼女が自分のために争いに駆けていく姿に嬉しく、誇らしい気持ちを

持ちつつも、本当は常に自分の隣にいて欲しいという気持ちをひた隠している。彼女の隊が出撃したという知らせを受けると、無事に帰ってきたと言う報告を受けると眠れない夜が続いている。



## 第一話 起動（スタート・アップ）

「本当に行ってしまったわね？」

「はい、私にはおこなわなければならない使命がございます。貴方様には申し訳ありませんが、私は貴方様をお守りする為に、武器を取りました。その決意に未だ変わりはありません」

暗く静まり返った一室に2人の少女の姿があつた。1人の少女は所々に緻密な刺繍が施された純白のドレスを身にまとい、もう1人の少女は品位ある濃紺色の制服をまとい、襟元と左胸には多くの勲章が煌めいていた。

2人は向かい合い、見つめ合っていた。純白の少女が濃紺色の少女の手を取り、その手を離すまいと力を込めていた。濃紺色の少女はそれでも自らは決めた道を歩むと目を真っ直ぐ見つめ直した。

「……貴女に何を言っても無駄なのは分かっています。でも、これだけは守ると誓いなさい。……必ず、私の元に戻ると。多少の怪我ならば許します。しかし、必ず健勝な姿を私に見せると。誓って、くれませぬ？」

「もちろんです、この命は全て貴女のために。」

「約束ですよ。もしも危ういなと思ったら、私も行っちゃいますからね？……あの青き星、地球に」

2人の足元の床はいくつものパネルに光化学カメラから転送された映像を映し出し、一枚の大きなスクリーンとなっていた。薄青白く光り、2人を照らしている。

そのスクリーンに映っているのは、多くの生物と人類が繁栄している……地球だった。

—————

「……『変化』には前触れというものはない。いつだって唐突だ。地球の衛星軌道上に空間転移門、『ゲート』が突如出現した。スカイ

フオール”。それを見た人々は得体の知れない恐怖を一同に口にした。

曰く、「地球外生命体の侵略だ」。曰く、「世界の滅亡だ」。曰く、曰く、曰く、

その憶測に憶測を呼んだ噂話についてに決着がつく事なく、人々はその恐怖になれかけていた。

“スカイフオール”から数十年。

未だ世界紛争は至る所で起きているが、ある兵器の誕生が近代戦闘の戦術を一変させる。

拡張型武装及びモジュール結合システム

Extended Armament & Module  
Assemble & Combine System  
通称 “EXAMACS (エグザマクス)”。

《EM》と呼ばれる人型ロボットの登場が瞬く間に世界の軍事バランスを塗り替えた。

その汎用性と量産性を兼ね備えたロボットの登場に人々は歓喜した。紛争が加速した事も否定はできないものの、

正体の見えない不安に対する備えが出来たことに安堵していた。

しかし、そんな安寧の日々も長くは続かない。

2XXX年末。

再び、地球軌道上に『ゲート』が出現する。

『ゲート』から現れたのは、地球人と似た容姿の惑星バイロン人だった。

バイロン軍は地球のEMとよく似た機体 “ポルタノヴァ” で各国に攻撃を開始。オセアニア連邦が陥落した。

紛争をしていた各国は地球連合軍を結成し、バイロン軍との戦争を開始した。

「……というのが前回までの授業のおさらいです。ところで、つい先日第4砂漠地区で大規模な戦闘が行われたんだけど、みんなは知ってるかな？リゾルート君？」

「……はい。第4砂漠地区はその名の通り砂漠地帯でEMの足が取ら

れる事が作戦前から予想されており厳しい戦闘になる事が想定されていました。」

極東地区。——地球連合軍結成以前には日本と呼ばれていた国のNシティにある高等学校の中の一室で近代歴史の授業が行われていた。薄幸そうな、少し頬骨が浮き出た顔に眼鏡をかけた男性教師に1人の男子生徒が声をかけられ、質問に答えていた。

男子生徒は少々気怠そうに立ち上がり、しかしながら要点をまとめ聞き手が分かりやすいように話し始めた。

「対策としてクローラーを脚部に武装したり、機体自体の重量を軽くするなどで対処しました。対するバイロン軍は地球連合軍が視界不良になるとして切り捨てたホバークラフトを採用し、高速移動を実現して地球連合軍を翻弄しました。ホバー形態を装備したポルタノヴァ、呼称《ゴーストヘッド》はその高速移動を武器に戦場を攪乱。地球連合軍は大きな被害を受けました。しかしあわや陥落かと思われた直前。危機に瀕した地球連合軍は虎の子の第74特殊部隊コントラルト隊を投入し、戦況を持ち直しました。ダメ押しに試験機として開発されていた《アルト・アサルト》を実戦投入したことにより地球連合軍はバイロン軍を徐々に圧倒し、勝利を納めました」

「素晴らしい。流石リゾルト君です！報道されてることでだけでなく、自力でもよく調べられていますね。着席していいですよ」

男子生徒に着席を促し、男性教師は黒板に向き直って授業を再開した。

男子生徒が促されたままに着席すると、隣の席の女子生徒に囁くような小さな声で話しかけられた。

「流石我がクラス、いいえ、我が校一の秀才の蓮斗<sup>レント</sup>・リゾルト君ね。先生に褒められて鼻が高いんじゃない？」

女子生徒は端麗に整えられた顔に人懐っこい笑顔を浮かべ、ニヤリと微笑んだ。男子生徒——蓮斗・リゾルトの顔を揶揄うように下から覗き込む。

しかし蓮斗はそれを意に介すことなくそれほどのことでもない、と肩を竦めるだけだった。

「俺が答えたのはほぼテレビや新聞とかで普通に報道されていることを並べただけだよ。特に調べたとかじゃない」

「あれ〜？でもバイロン軍の新型機の名前とか性能とかは大々的に報道されてないよねえ？なの知ってるのはなんで？だから先生にも褒めてもらったんじゃない？」

「……………どこかの地球連合国軍第74特殊部隊所属の准尉殿が聞いてもない機密事項ギリギリのことをペラペラとお喋りしてくれるから嫌でも聞こえて来るんですよ」

「あらあらあら！じゃあその准尉様にお礼を試してみたらどう？例えば放課後にヌクドナルドのハンバーガーを……馳走するとか！」

名案！とばかりに手のひらを打ち合わせた女子生徒。授業中ということを考慮してなのか音こそは出なかったものの、気分が高揚したのか、声のトーンが一つ上がり、周りの学友には声が聞こえていることだろう。

そんな女子生徒に蓮斗は呆れたようにため息を一つ溢した。

「……………どこの世界に苦学生に飯をたかる軍人がいるんでしょうね？プレスト・アマービレ准尉殿？」

プレスト・アマービレ。それが女子生徒の名前であり、地球連合国軍第74特殊部隊准尉の名前でもあった。

彼女は先の蓮斗の説明にあった地球連合国軍の特殊部隊に所属する軍人でもある。

本人と両親の強い希望で特例として高等学校に通っているが、その正体は腕利きのパイロットなのだった。

「いーの。軍の軍人である前に蓮斗の幼馴染だもん。ただ幼馴染に先生に褒められた切っ掛けを作ったお礼をして欲しいだけでもーん」

「軍人なんだから俺なんかよりもいい給料貰ってるだろ」

「ダメダメ。ウチ、お小遣い制だもん。お給料もパパが知ってるから誤魔化せないし…………」

「それでもたくさん貰ってるんじゃない？」

「蓮斗、知ってる？お洒落ってお金かかるんだよ？」

「つまり自業自得だね」

蓮斗の両肩を掴みながら力説するようにそのアメジストの様な瞳に力を込める。が、必死の抗議も虚しく、無い袖は触れないと断られてしまった。せめてもの抵抗と目尻に涙を溜め、蓮斗の肩を前後に揺さぶる。

最早授業中だと言う事も忘れてしまっている様だ。

「なんでよー！ーいーじゃん!!お腹すいたよー！今日はお仕事お休みの日だから勤務食出ないのー！ヌックバーガー食べたいよー！ポテトー！ナゲットー！シェイクー！」

「強請るのがダメだからって揺するのはやめい。あー、准尉殿、准尉殿、今はなんの時間だか忘れてはおられませんか？」

「なんの時間ってそれは、6時、げん、め……………」

腕の中でされるがままに揺さぶられていた蓮斗に現実引き戻され、ヒートアップしていた頭が冷静になり、周りを見渡すと、自分の声に驚いたであろうクラスメイトの顔と、ああ、いつものかと言わんばかりの視線にプレストは顔を真っ赤に染めて机に蹲ってしまう。

「あー、アマービレ君、任務が忙しくて大変だからといって食事を疎かにするのはいけないよ。今日の授業も僕の授業でおしまいです。早めに終わらせるようにしますのであと小一時間、頑張ってください」「はい………」

周囲のクスクスという笑い声に耐えられず、机の上で腕を組み、顔を隠したままどんどん小さくなっていくその姿は飼い主に叱られた小型犬を彷彿とさせるのだった。

「蓮斗の所為だ……………」

「理不尽な。そんなに今月厳しいならバイトでもすれば？」

「軍人は副業は不可です」

蓮斗の提案に机に伏した状態のまま手だけでバツ印を作り、棄却する。しかし蓮斗はそうじゃなくて、と続けた。

「金銭の絡まない仕事なら問題ないでしょ？」

「え？」

「放課後。妹のー蘭香<sup>ランカ</sup>の面倒を見てくれるなら、ウチで軽く食べていけばいい。蘭香なら喜んで準備してくれると思う」

「ホント!?!」

「ああ。俺は今日もバイトだからな、その間蘭香のことを見てくれてたら嬉しい」

「見る見るーいくらでも見るよー!それに蘭香ちゃんのご飯とってもおいしいもんー!」

「それは蘭香に言っただけで欲しい。そうすれば蘭香も喜ぶ。それはそれとして、落ち着いたら授業に集中してくれ。追試の面倒までは見切れないからな」

「はい♪」

蓮斗の妹の蘭香・リゾルトの作った料理を食べられると聞き、一気に機嫌が良くなるプレスト。ご飯にありつけるといふことだけでなく、蘭香に会えるというのも理由としてあるのだろう。蓮斗の幼馴染であるプレストにとっても蘭香・リゾルトという存在はとても可愛い妹なのであった。

—————

「ーというこで、御相伴に預かりたいと思います!隊長!」

「了解であります!ーってなあんだ、そういう事なのかあ。てつきりやつとぶー姉がお兄ちゃんのハートを射止めたのかと思ったのに!」

「そ、そんなことしないし!?!」

放課後、妹の蘭香を彼女の小学校まで迎えにいき、夕飯兼プレストの軽食の為に買い出しに来ていた。

プレストを連れた蓮斗の姿に蘭香はとても驚き、問い詰めていた。

「……ハートを射止めるって微妙に古いいまわしをしってるな」

「そうだよ、それに彼氏とか、まだ早いし……」

「えー、そんな事ないよー!わたしの友達にも中学生の彼氏がいる子いるもーん」

「え、えええええええつ!?!」

「それは……進んでるな……」

蘭香の友人の話に衝撃を受ける2人。あまりのショックにその場で頭を抱えて座り込んでしまうプリスト。頭を抱えたまま私なんて

今まで一度も…、なんて口走ってしまうくらいには動揺しているようだ。

「そう言う蘭香はそんな相手はいないのか？」

「えー、私はいいかなあ。小学校の友達もいいなって思う子いないし、お兄ちゃん達のこと知つてると、中学生でもなんでいうか、子供っぽいつ思っっちゃうんだよねー」

「そんなこと言つて、本当は遠慮してるんじゃないのか？家の事は俺に任せて遊びたい時に遊んできていいんだぞ。蘭香は本当に頑張つてくれてる」

「遠慮なんて、してないよ。私、お家のことやるの大好きだし！」

そう笑みを浮かべて答える蘭香にプレストは胸を締め付けられるような思いで見守つていた。

蓮斗と蘭香の家庭には親というものがいない。母親はその命と引き換えに蘭香をこの世に生み出した。父親は数年前に突如行方知れずになったままなんの音沙汰もない。

無論、警察や人を頼り、何度も搜索しているものの、手がかりは何も見つけられない。

親戚筋を頼ろうにも両親のことは名前と年齢と、技術者であったことしか知らず、それ以外のことは戸籍上の事も含め、何もかもが『無かった』ことになっていた。

当時から世話になっているプレストの父親が保護観察責任者を引き受けたことにより、施設入りは免れているが、最悪の場合、2人は離れ離れになってしまう事もありえた。

そんな家庭状況なため、2人は国営の集合住宅の一室を借り上げ、蓮斗は学業に支障をきたさない範囲でバイトをいくつも掛け持ちし、そんな兄を助ける為に蘭香は小学生の身ながら自ら炊事洗濯家事全般を引き受けていた。

当然、そんな生活では友達と遊びに行くなんてことが出来るはずもなく、蘭香にはとても寂しい想いをさせてるのではないかと蓮斗は日頃から気に掛けていた。

「友達だつて学校でいつも遊んでるから寂しくないし、今日だつて新

しいお友達が出来たんだよ！」

気丈に振る舞うわけでもなく「至って普通のこと」のように言う蘭香にプレストは心臓を鷲掴みにされた様な感覚を憶えた。

「それに、私がほかの男の子にとられちゃでたらお兄ちゃん寂しいでしょ？」

「そんなことはない。俺よりも勉強が出来て身体能力も良く、容姿端麗で蘭香を幸せに出来る財力と気力と蘭香を守れるくらいの手段を有してるやつなら誰でもいいさ」

「……………ちよつとそんなハイスペックどころかパーフェクトスペックな彼氏はこの世には居ないかな」

「冗談だよ」

蓮斗も蘭香もそんな状態なのにも関わらず、いつも和かに笑っている。何事もないかのように笑っている。その光景を見るたびにプレストはなんとも言えない気持ちになる。

「それにね、お兄ちゃん、ぷー姉」

「なに？蘭香ちゃん？」

「わたしね、今の生活が毎日楽しいんだ！毎日お兄ちゃんが新聞を配るお仕事から帰ってきた後、一緒にご飯を作って、一緒に登校して、毎日学校でお勉強して、終わった迎えにきてくれて、たまにそこにぷー姉がいてくれて、今日みたいに一緒に買い物に行つて、ご飯を作ってみんなで食べて、お掃除とかしながら楽しくお喋りしたり、遊んだりする毎日がとっても楽しいから、そんな毎日が続けばいいなっと思うんだ」

「……………そうだな、そんな日が続けば良いな」

「任せてよ、蘭香ちゃん！そのために私たち地球連合軍の軍人がいるんだもん！私たちが蘭香ちゃんの平和な毎日を守るよ！」

「フンス！と両方の拳を胸の前で握り、やる気をしめすプレスト。

「えー、ぷー姉がく？ちよつと頼りないかなあ」

「確かに。プーレは軍人に向いてる性格じゃないしな。機密情報も簡単にバラすし」

「ヒドっ!?そ、そんな事ないし！これでもエース部隊の隊員なんだか



らね!？」

アハハ、と声を上げて3人で手を繋いでスーパーマーケットへと向かう。その光景はまさに蘭香の望んでいる平和な毎日だった。

「……しかし、『変化』というのはいつでも前触れなく、唐突に現れる。」

「ねえ、蘭香ちゃん、その、『ぷー姉』っていうのそろそろやめない？ 私特にプー太郎でもないし……」

「え、プー太郎？何で？『ぷー』かわいいじゃん！『ぷー』だよ、『ぷー』。黄色いくまさんと同じなんだよ？」

「あんまりぷー、ぷー言わないで……。もういいです、それで……」  
「ところでプーレ、携帯鳴ってないか？」

「え？本当だ。隊長から？なんだろう？」

震える携帯端末を取り出し、着信を受け取るプレスト。端末を耳にそえると同時に聞こえてくるのは怒号だった。

「《馬鹿野郎！アマービレえ!!なんで何回もかけてるのに通信に出ねえ！緊急出動だ！今どこにいる!?!》」

「うひゃあ!?!た、隊長!?!なんでそんなに怒ってらっしやりますか!?!緊急出動って!?!」

少し離れた蓮斗や蘭香にまで伝わってくる怒号。しかしその中には明確かつ、多分に焦りの色が滲み出ていた。

「《バイロン軍だ!!つい先ほどどこからともなく現れ、現在極東地区上空を高速移動中!》」

「っ!?!」

周囲にサイレンが響き渡る。数十年間いつも心のどこかで恐怖していた感覚。いつも報道を見るたびに鳴り響く音。

バイロン軍襲来の警報が町中に響いた。

蘭香は蓮斗の手を強く握る。

「場所は何?どこですか!?!直接向かいます!ロイロイで私のEMを回してください!!」

「《分かった。おそらく奴らの目的地は……》」

空が翳る。確か今日は分厚い雲が空を漂っていた。蓮斗は空を見

上げると蘭香と繋ぐ手を更に強く握り返し、深くため息をついた。  
「プーレ。敵の目的地はー」

「ここだ」

「《Nシティだ！》」

地面が割れる音と同時に平和を願う少女の想いは儂くも崩れた。

街は戦火に燃える。

『変化』とは前触れなく、唐突に訪れる。苛烈に熾烈に猛烈に痛烈にまるでそれが当然だと言うように当たり前かのように全てが変容していく。

ー戦火はまだ広がる。まだすべて始まったばかりなのだから。